第９章　友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との関係に介在するメカニズム
—ディストレス／ユーストレス生成モデルの検討—

第８章では，友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との関係に介在するメカニズムの１つとして，素因ストレスモデルを検討した．すなわち，友人関係でストレス（ネガティブな出来事）が発生した時に，３つの目標がそのネガティブな影響を緩和ないし増長することにより，抑うつ傾向を抑制ないし促進するかどうかを検討した．

第９章では，目標志向性と抑うつ傾向との関係に介在するもう１つのメカニズムとして，ディストレス／ユーストレス生成モデルを検討する．すなわち，ディストレス／ユーストレス生成モデルの行動過程（目標志向性→対人行動→ネガティブな出来事の発生頻度／ポジティブな出来事の発生頻度→抑うつ傾向）と，ディストレス／ユーストレス生成モデルの認知・感情過程（目標志向性→拒否／受容への期待・感受性→出来事のネガティブな知覚／ポジティブな知覚→抑うつ傾向）を検討する．

第９章の構成は次の通りである．まず，第１節において，ディストレス／ユーストレス生成モデルの行動過程を，横断的（研究８）及び縦断的（研究９）に検討する．横断的検討では，対人行動，ディストレス，そしてユーストレスの評定として，被調査者による評定を用いた検討(研究８—１）と，これらの変数の内，向社会的行動とユーストレスの評定として，教師による評定を用いた検討（研究８—２）を行う．

次に，第２節において，ディストレス／ユーストレス生成モデルの認知・感情過程を，横断的（研究 10）及び縦断的（研究 11）に検討する．

最後に，第３節において，以上の検討結果を要約する．

第１節　ディストレス／ユーストレス生成モデルの検討１—行動過程の検討—［研究８・９］

第１項　自己評定を用いた横断的検討　［研究８—１］

目的

本研究の目的は，「目標志向性→対人行動→ネガティブな出来事の発生頻度／ポジティブな出来事の発生頻度→抑うつ傾向」という，ディストレス／ユーストレス生成モデルの行動過程を横断的に検討することである．仮説は以下の通りである．

（１）経験・成長目標と抑うつ傾向との負の関係について：経験・成長目標をもつ生徒は，積極的に友人関係を構築・維持するための行動（関係構築・維持行動）をとるため，友人関係でネガティブな出来事に遭遇する頻度が低まり，ポジティブな出来事に遭遇する頻度が高まるため，抑うつ傾向に陥りにくいであろう．

（２）評価—接近目標と抑うつ傾向との負の関係について：評価—接近目標をもつ生徒は，友人に対して親切で友好的な振る舞い（向社会的行動）や積極的な関係構築・維持行動をとるため，友人関係でネガティブな出来事に遭遇する頻度が低まり，ポジティブな出来事に遭遇する頻度が高まるため，抑うつ傾向に陥りにくいであろう．

（３）評価—回避目標と抑うつ傾向との正の関係について：評価—回避目標をもつ生徒は，積極的な関係構築・維持行動がとれないため，友人

関係でネガティブな出来事に遭遇する頻度が高まり，ポジティブな出来事を経験することができなくなるため，抑うつ傾向に陥りやすくなるであろう．

なお，本研究では，対人行動，ポジティブな出来事の頻度など，全ての変数について，被調査者自身により評定された．

方法

被調査者　群馬県内の公立E中学校の1年生50名（男子23名，女子26名，不明1名），2年生57名（男子25名，女子31名，不明1名），3年生70名（男子38名，女子32名），合計177名．

調査時期　2001年12月上旬．

質問紙　**目標志向性尺度**：研究1において作成された尺度を用いた．

対人行動尺度：関係構築・維持行動と，向社会的行動を測定するために，庄司（1991）の社会的スキル尺度の下位尺度である「積極的・主張的関わりスキル尺度」と，「共感・援助スキル尺度」をそれぞれ用いた．項目は，両尺度とも庄司（1991）において因子負荷量の高かった上位5項目（積極的・主張的関わりスキル尺度は，「友達を遊びに誘う」，「友達と一緒にいる」，「友達に食べ物や飲み物をおごる」，「友達に会った時，自分から声をかける」，「友達に自分の物を貸す」の5項目である．共感・援助スキル尺度は，「友達が失敗した時，励ましたりなぐさめたりする」，「友達が困っている時，手助けする」，「友達が1人でさみしそうな時は，声をかける」，「友達が何かをうまくした時，『上手だね』などとほめる」，「友達に何かを頼まれた時，それに応じる」の5項目である）を用いた．評定は，「ぜんぜんそうでない」（1点），「あまりそうでない」（2点），「ときどきそうである」（3点），「いつもそうである」（4点），の4件法

であった．

友人関係におけるネガティブな出来事（ディストレス）／ポジティブな出来事（ユーストレス）尺度：高比良（1998）により作成されたライフイベント尺度の下位尺度である；対人領域のネガティブライフイベント尺度及びポジティブライフイベント尺度の短縮版の項目を，友人関係における出来事に修正して用いた．ネガティブな出来事の項目は，「友だちから無視された」，「友だちとの関係がだめになった」，「友だちから誤解された」などであり，研究５において利用されたストレス尺度と同じである．また，ポジティブな出来事の項目は，「友だちから信頼された」，「友だちがやさしくしてくれた」，「友だちから理解された」などである．なお，高比良（1998）におけるネガティブな出来事の項目番号 10 は，友人関係における出来事に修正すると，項目番号 12 と重複するため，そして，恋愛関係に関するポジティブな出来事（高比良（1998）における項目番号 11）は，友人関係における出来事に修正できないため，それぞれ削除した．従って，ネガティブな出来事の項目が 14 項目，ポジティブな出来事の項目が 14 項目，合計 28 項目を用いた．また，出来事の発生頻度としては，岡安他（1992）を参考に，最近３ヶ月間に起こった頻度を，「ぜんぜんなかった」（０点），「たまにあった」（１点），「時々あった」（２点），「よくあった」（３点）の４段階で尋ねた．

抑うつ傾向尺度：研究２―１と同じであった．

手続き　担任教師によってクラス毎に集団で実施された．

結果と考察

分析に先立ち，各尺度の平均値，標準偏差，そして尺度間の相関係数を求めた．結果は Table 9－1 に示されている．平均値及び標準偏差をみ

Table 9－1 各尺度の平均値(*M*)及び標準偏差(*SD*)と尺度間の相関係数

	M	*SD*	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
① 経験・成長目標	28.07	5.40	.49 **	.11	.49 **	.37 **	.42 **	.10	-.23 **
② 評価－接近目標	18.76	4.06	—	.48 **	.36 **	.29 **	.34 **	.03	-.11
③ 評価－回避目標	19.72	4.24		—	.19 *	-.05	-.01	.09	.29 **
④ 向社会的行動	14.57	2.22			—	.43 **	.42 **	.12	-.14 +
⑤ 関係構築・維持行動	13.99	2.19				—	.45 **	-.03	-.42 **
⑥ ポジティブ出来事頻度	19.14	7.93					—	.27 **	-.28 **
⑦ ネガティブ出来事頻度	11.27	6.47						—	.28 **
⑧ 抑うつ傾向	19.75	4.65							—

注) * p <.05, ** p <.01. N=177.

る限り，各尺度に得点の偏りはないものと考えられる．

次に，ディストレス生成モデルとユーストレス生成モデルを検討するために，「目標志向性→対人行動→ネガティブな出来事の頻度およびポジティブな出来事の頻度→抑うつ傾向」というプロセスを，重回帰分析により検討した．標準偏回帰係数が５％水準で有意になった結果を，Figure 9－1に示す．

まず，「目標志向性→対人行動」について重回帰分析を行った．関係構築・維持行動に対して重回帰分析を行ったところ，重回帰式は有意になった（$F(3,\ 173)=13.07$, $p<.01$, $R^2=.19$）．結果から，仮説通り，経験・成長目標と評価－接近目標から正のパス，評価－回避目標から負のパスが示された．また，向社会的行動に対しても重回帰式は有意になった（$F(3,\ 173)=21.11$, $p<.01$, $R^2=.27$）．結果から，経験・成長目標からの正のパスが示された．仮説に反して，評価－接近目標からの正のパスは示されなかった．

次に，「目標志向性・対人行動→ネガティブな出来事の頻度」及び「目標志向性・対人行動→ポジティブな出来事の頻度」について重回帰分析を行った．ネガティブな出来事に対する重回帰分析の結果，重回帰式は有意にならなかった（$F(5,\ 171)=1.21$, *n. s.*）．他方，ポジティブな出来事に対しては，重回帰式は有意になった（$F(5,\ 171)=16.45$, $p<.01$, $R^2=.33$）．有意になった標準偏回帰係数を検討してみると，仮説通り，関係構築・維持行動及び向社会的行動から正のパスが示された．同時に，経験・成長目標と評価－接近目標から，弱いながらも直接的な正のパスが示された．

最後に，「目標志向性・対人行動・ネガティブな出来事の頻度・ポジティブな出来事の頻度→抑うつ傾向」について重回帰分析を行ったとこ

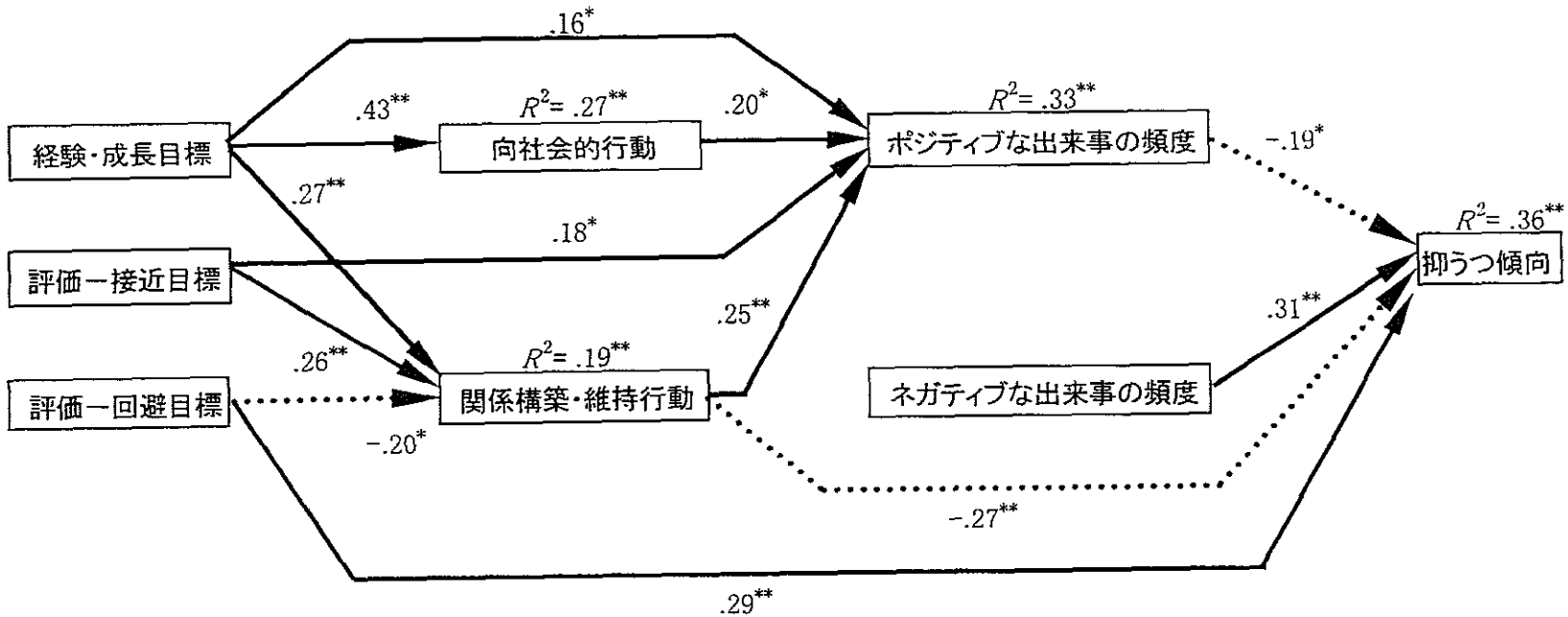


Figure 9－1 「友人関係における目標志向性→対人行動→ネガティブおよびポジティブな出来事の頻度→抑うつ傾向」の重回帰分析の結果

注） 数値は標準偏回帰係数である．また，実線の矢印は正の影響を，点線の矢印は負の影響をそれぞれ表す．＊p <.05，＊＊p <.01．N=177.

ろ，重回帰式は有意となった（$F(7,\ 169)=13.65$, $p<.01$, $R^2=.36$）．抑うつ傾向に対しては，仮説通りポジティブな出来事から負のパス，そしてネガティブな出来事から正のパスが示された．同時に，評価－回避目標から直接的な正のパス，関係構築・維持行動から直接的な負のパスも示された．

以上の結果から，３つの目標と抑うつ傾向との関係については以下のように説明することができる．まず，経験・成長目標と抑うつ傾向との負の関係については，経験・成長目標の高い生徒は，関係構築・維持のために友人に積極的に働きかけたり，親切で友好的な振る舞いをすることによって，友人関係においてポジティブな出来事を経験しやすくなり，結果として抑うつ傾向が低まっている（ユーストレス生成モデル），と説明できる．経験・成長目標から向社会的行動への正のパスは仮定していなかったが，向社会的行動と関係構築・維持行動が中程度の相関（.43, $p<.01$）を示したことも踏まえると，経験・成長目標の高い生徒は，親密な関係を維持・促進するために，友人に対して向社会的な振る舞いをしていることがうかがえる．

次に，評価－接近目標と抑うつ傾向との負の関係については，評価－接近目標の高い生徒は，関係構築・維持のために友人に積極的に働きかける（接近行動）ことにより，ポジティブな出来事を多く経験でき，その結果，抑うつ傾向が低まっている（ユーストレス生成モデル）と説明することができる．ただし，仮説に反して，評価－接近目標から向社会的行動への正の有意なパスは示されなかった．本研究で用いた共感・援助スキル尺度は，比較的あからさまで顕現的な向社会的行動を測定しているが，評価－接近目標の高い生徒は，その目標（性格について良い評価を得て，好かれること）を達成するための，より巧みな印象管理を行

っているのかもしれない．今後，評価－接近目標をもつ者の対人的振る舞いについて，より詳細に検討する必要がある．

そして，評価－回避目標と抑うつ傾向との正の関係については，評価－回避目標の高い生徒は，友人との関係構築・維持のための積極的な振る舞いができず引きこもりがちになる（回避行動）ため，ポジティブな出来事を経験できなくなり，その結果として抑うつ傾向が高まる（ユーストレス生成モデル），と説明できる．

以上のように，３つの目標と抑うつ傾向との関係は，いずれも本研究で新たに提唱されたユーストレス生成モデルから説明できるであろう．特に，同じ評価への関心を示す評価目標でも，良い評価に関心を向ける評価－接近目標と，悪い評価に関心を向ける評価－回避目標とで，何故抑うつ傾向に異なる影響を与えるかに関しては，友人への接近（ないしは友人関係の積極的構築）を方向づけて，ポジティブな出来事をより多く経験できるようにするか，友人（あるいは友人関係の構築）からの回避を方向づけて，ポジティブな出来事を経験できないようにするかという，ユーストレスの生成プロセスにおける違いがあるためであると説明することができる．従来，抑うつ傾向など不適応をもたらすとされていた評価－接近目標は，友人関係における積極的な行動と関係の構築・維持を促進する働きをもつという意味で，適応的な役割を果たしていることを本研究は示している．

また，本研究の結果から，３つの目標及び２つの対人行動からネガティブなストレッサー(ディストレス)への有意なパスは示されなかった．従って，Dykman（1998）の提唱したディストレス生成モデルは支持されなかった．本研究においては，Dykman の仮定している「価値の保証を求める行動」(第１部第２章第１節第２項及び第２節と，第１部第６章第２

節第２項も参照のこと）を取り入れてディストレス生成モデルを検討したわけではなかったが，３つの目標からディストレスへの直接的な有意なパスがいずれも示されなかったため，友人関係における目標志向性がディストレスを促進ないし抑制しているとはいえないようである．友人からのポジティブな反応を引き出す（ないしは，引き出せない）ことに比べると，ネガティブな反応は防ぐことが難しい（ないしは，そう簡単には起こりやすくならない）のかもしれない．

ところで，本研究から，経験・成長目標及び評価－接近目標からポジティブな出来事に対する直接的なパスが示された．この結果は，２つの目標がポジティブな出来事を誘発するメカニズムとして，向社会的行動と関係構築・維持行動以外の対人行動，ないしは対人行動以外の変数が関与している可能性を示唆している．この過程に関して，今後より詳細な検討が必要である．そして，評価－回避目標から抑うつ傾向に対する直接的なパスが示された．この結果から，評価－回避目標が抑うつ傾向をもたらすメカニズムとして，ユーストレス及びディストレスの生成の行動過程以外の過程が関係していると考えられる．この過程に関しては，研究５において検証された素因ストレスモデルや，研究 10・11 において検討されるディストレス／ユーストレス生成モデルの認知・感情過程が関係していると考えられる．最後に，関係構築・維持行動から抑うつ傾向への直接的なパスが示された．この結果は，関係構築・維持のために友人関係で積極的に振る舞うことが，ポジティブな出来事を促進することを通して抑うつ傾向を抑制するのみならず，それ自体，抑うつ傾向の阻止につながることがある，ということを示している．

第２項　教師評定を用いた横断的検討　[研究８—２]

目的

研究８—１においては，被調査者による評定を用いて，ディストレス／ユーストレス生成モデルの行動過程を検討した．その結果，３つの目標と抑うつ傾向との関係には，いずれもユーストレス生成モデルの行動過程が介在していることが示された．

しかしながら，研究８—１の被調査者の評定による検討には，以下の２つの問題点があげられる．第１に，ユーストレスの評定に関して，より主観的な評価が混合している可能性が考えられる．ユーストレス生成モデルをより正確に検討するために，第三者からみて客観的にユーストレスを経験しているかどうかを検討する必要があろう．第２に，向社会的行動の評定は，社会的望ましさの影響を受けやすいという点があげられる．

そこで，本研究では，ユーストレスと向社会的行動の測度として，より客観的な「教師による評定」を用いて，３つの目標との関係を横断的に検討する．

方法

被調査者　群馬県内の公立Ｅ中学校の１年生 50 名（男子 23 名，女子 26 名，不明１名），２年生 57 名（男子 25 名，女子 31 名，不明１名），３年生 70 名（男子 38 名，女子 32 名），合計 177 名．以上の被調査者は，研究８—１と同じである．

調査時期　2001 年 12 月上旬．

質問紙　**目標志向性尺度**：研究１において作成された尺度を用いた．

向社会的行動の教師評定：向社会的行動に関しては，「クラスの生徒の皆さんが，日頃友だちに対してどれくらい思いやりのある，親切な振る舞いをしていますか」という質問に対して，「ほとんどしていない」（1点），「あまりしていない」（2点），「ときどきしている」（3点），「いつもしている」（4点）の4件法で，担当クラスの生徒それぞれについて評定を求めた．

ユーストレスの教師評定：ユーストレスの指標として，生徒がどれくらいポジティブな友人関係をもっているかについて評定を求めた．つまり，「クラスの生徒の皆さんが親密な友人関係（例えば，支え合ったり，楽しく会話したりする関係）をもっていますか」という質問を設定し，「いいえ」（1点），「どちらかといえばいいえ」（2点），「どちらかといえばはい」（3点），「はい」（4点）の4件法で尋ねた．

手続き　目標志向性に関しては，担任教師によってクラス毎に集団で実施された．教師評定は，担任教師によって個別に行われた．

結果と考察

まず，各尺度の平均値・標準偏差と各尺度間の相関係数を求めた（Table 9－2）．平均値と標準偏差を見る限り，各尺度に得点の偏りはみられなかった．

次に，「友人関係における目標志向性→教師評定による向社会的行動」について重回帰分析を行った（Figure 9－2）．その結果，重回帰式は有意となった（$F(3,\ 173)=2.72$, $p<.05$, $R^2=.05$）．結果から，経験・成長目標から向社会的行動への正の有意なパスが示された．評価－接近目標からの正の有意なパスは示されなかった．

次に，「友人関係における目標志向性→教師評定によるポジティブな

Table 9−2 各尺度の平均値(*M*)及び標準偏差(*SD*)と尺度間の相関係数

	M	*SD*	②	③	④	⑤
① 経験・成長目標	28.07	5.40	.49 **	.11	.20 **	.16 *
② 評価−接近目標	18.76	4.06	−	.48 **	.14	.21 *
③ 評価−回避目標	19.72	4.24		−	.08	-.03
④ 教師評定:向社会行動	2.76	.80			−	.32 **
⑤ 教師評定:友人関係	2.92	.77				−

注) * p <.05, ** p <.01. N=177.

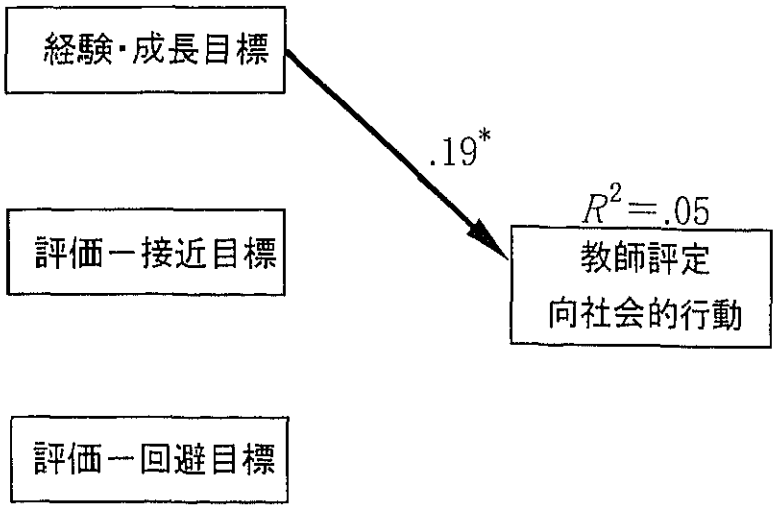


Figure 9－2 「友人関係における目標志向性→教師評定による向社会的行動」の重回帰分析の結果

注） 数値は標準偏回帰係数である. ＊p <.05. N=177.

友人関係」について重回帰分析を行った（Figure 9－3）．その結果，重回帰式は有意になった（$F(3, 173)=4.06$, $p<.01$, $R^2=.07$）．結果から，評価－接近目標からの正の有意なパスと，評価－回避目標からの負の有意傾向のパスが示された．経験・成長目標からの有意なパスは示されなかった．

教師評定を用いた結果は，経験・成長目標とポジティブな友人関係との関係以外は，被調査者の評定による結果とほぼ一致していた．経験・成長目標とポジティブな友人関係が正の関係を示さなかったことについては，評定法の限界のためであることが考えられる．すなわち，担任教師が生徒の友人関係を把握する際に，クラスでの様子以外の，例えば部活動や放課後における各生徒の友人関係の様子を把握できるかといえば，必ずしもそうであるとは限らない．今後は，教師評定以外に，仲間評定などを用いて，再度，経験・成長目標とポジティブな友人関係について検討する必要があろう．

第３項　縦断的検討　［研究９］

目的

本研究では，目標志向性のディストレス／ユーストレス生成モデルの行動過程を，縦断的に検討する．

方法

被調査者　栃木県内の公立Ｂ中学校の１年生 117 名（男子 52 名，女子 65 名；第２回目調査では全て２年生に進級している）．なお，被調査者は研究５と重複している．

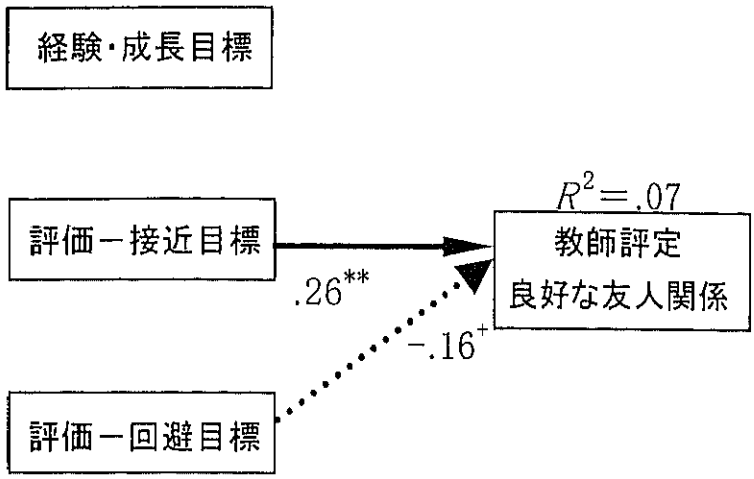


Figure 9－3「友人関係における目標志向性→教師評定によるポジティブな友人関係」の重回帰分析の結果

注） 数値は標準偏回帰係数である．＋p <.10，** p <.01．N=177．

調査時期　第１回目調査は 1999 年 11 月に実施し，第２回目調査は 2000 年 12 月に実施した．

質問紙　**目標志向性尺度**：研究１において作成された尺度を用いた．

友人関係におけるネガティブな出来事／ポジティブな出来事尺度：研究８―１と同様，高比良（1998）の対人ライフイベント尺度の短縮版を，友人関係における出来事に修正して用いた．項目や発生頻度の評定は，研究８―１と同じであった．

抑うつ傾向尺度：研究２―１と同じであった．

手続き　第１回目の調査（以下，Time１ないし T１と略記）において目標志向性尺度と抑うつ傾向尺度を実施し，１年１ヶ月後の第２回目調査（以下，Time２ないし T２と略記）において，ネガティブな出来事／ポジティブな出来事尺度と抑うつ傾向尺度を実施した．調査は全て担任教師によってクラス毎に集団で実施された．

結果と考察

分析に先立って，各尺度の平均値，標準偏差，そして尺度間の相関係数を求めた．結果は Table９―３に示されている．結果から，各尺度において，極端な得点の偏りは認められなかった．

次に，ディストレス生成モデルとユーストレス生成モデルを縦断的に検討するために，「Time１の目標志向性→Time２のネガティブな出来事の頻度およびポジティブな出来事の頻度→Time２の抑うつ傾向」という流れを，重回帰分析により検討した．結果を Figure ９―４に示す．

まず，「目標志向性→ネガティブな出来事の頻度」について重回帰分析を行ったところ，重回帰式は有意になった（$F(3, 113)=2.86$, $p<.05$, $R^2=.07$）．結果から，評価－回避目標からネガティブな出来事の頻度へ

Table 9－3 各尺度の平均値（*M*）及び標準偏差（*SD*）と尺度間の相関係数

	M	*SD*	②	③	④	⑤	⑥	⑦
① 経験・成長目標	29.58	4.75	.42 **	.50 **	.18 +	.31 **	-.07	-.07
② 評価-接近目標	19.22	4.22	—	.60 **	.10	.19 *	-.12	-.01
③ 評価-回避目標	19.60	4.19		—	.25 **	.05	.13	.21 *
④ ネガティブ出来事	10.09	6.34			—	.33 **	.28 **	.49 **
⑤ ポジティブ出来事	21.50	6.50				—	-.14	-.18 *
⑥ 抑うつ傾向（Time1）	17.19	3.63					—	.55 **
⑦ 抑うつ傾向（Time2）	17.64	3.87						—

注） + p <.10, * p <.05, ** p <.01. N = 117.

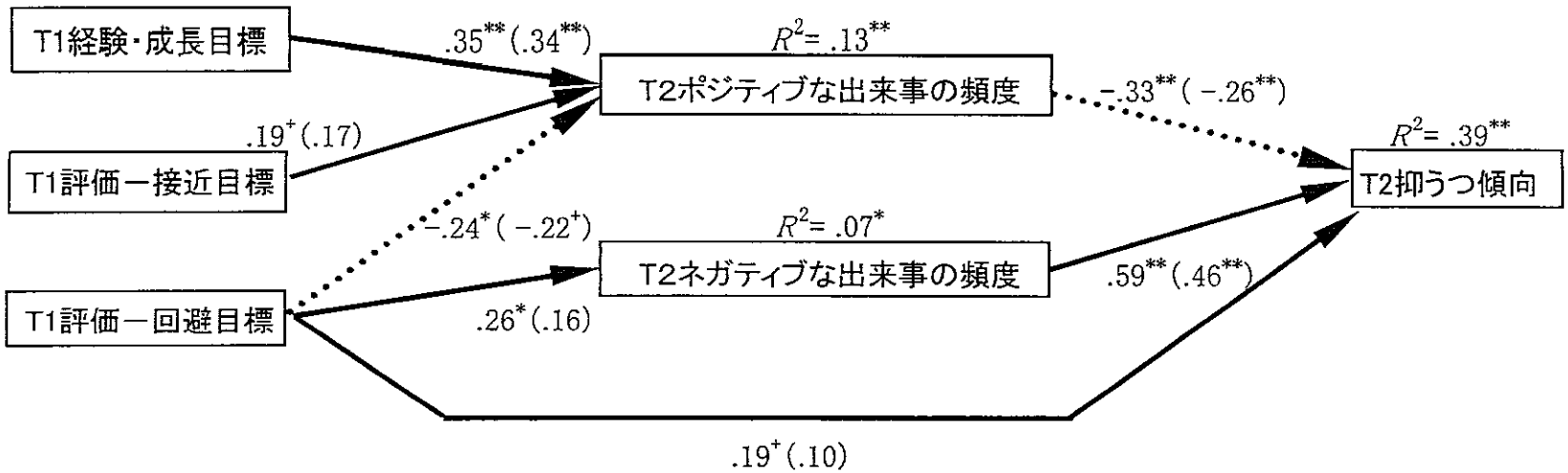


Figure 9－4 「Time1友人関係における目標志向性→Time2出来事の頻度→Time2抑うつ傾向」の重回帰分析の結果

注） かっこ内の数値は，Time1の抑うつ傾向を独立変数として投入した時の標準偏回帰係数である．
＋p <.10，＊p <.05，＊＊p <.01．N＝117．

の正のパスが示された．経験・成長目標及び評価－接近目標からの負のパスは示されなかった．

次に，「目標志向性→ポジティブな出来事の頻度」について重回帰分析を行ったところ，重回帰式は有意になった（$F(3, 113)=5.79$, $p<.01$, $R^2=.13$）．標準偏回帰係数を検討してみると，経験・成長目標から有意な正のパス，評価－回避目標から有意な負のパスが示された．また，評価－接近目標から正のパス（$\beta=.19$）が示されたが，有意傾向（$p<.10$）であった．しかし，1年間という期間を考えれば，$\beta=.19$ というパス係数は決して小さくない値であると考えられる．

最後に，「目標志向性・ネガティブな出来事の頻度・ポジティブな出来事の頻度→抑うつ傾向」について重回帰分析を行ったところ，重回帰式は有意となった（$F(5, 111)=14.15$, $p<.01$, $R^2=.39$）．抑うつ傾向に対しては，ネガティブな出来事から有意な正のパス，ポジティブな出来事からは有意な負のパスが示された．また，評価－回避目標からの有意傾向の正のパスも示された．

また，それぞれの重回帰分析において，Time 1 の抑うつ傾向も独立変数として投入して分析を行ったところ，上記の結果とほぼ同様の結果が得られた（Time 1 の抑うつ傾向を独立変数として投入した時の標準偏回帰係数は，Figure 9－4 のかっこ内の数値を参照のこと）．評価－接近目標からポジティブな出来事の頻度への正のパスが有意傾向でなくなったが，パス係数の減少は.02 とわずかであるため，上記とほぼ同じ結果とみなしてよいであろう．

研究８－１の横断的検討の結果と同じであった結果をまとめると，経験・成長目標と評価－接近目標はユーストレスを誘発することにより抑うつ傾向を低めており，評価－回避目標はユーストレスを誘発できない

ことにより抑うつ傾向を高めていると考えられる．これらの結果は，1年間という長期にわたっても，目標志向性がポジティブな出来事の誘発・非誘発に貢献するということを示すものである．

また，本研究の結果から，評価－回避目標からネガティブな出来事への正のパスが示された．しかし，横断的検討においては，これと同じ結果が示されていないため，評価－回避目標がネガティブな出来事を誘発するという，確固とした結論を下すことはできない．今後は，より安定した結果を得るために，さらに大規模なサンプルを用いるなどして，評価－回避目標とネガティブな出来事との関係を再検討する必要があろう．

第２節　ディストレス／ユーストレス生成モデルの検討２—認知・感情過程の検討—　［研究 10・11］

第１項　横断的検討　［研究 10］

目的

本研究では，「目標志向性→拒否への予期・感受性／受容への期待・感受性→出来事のネガティブな知覚／ポジティブな知覚→抑うつ傾向」という，ディストレス／ユーストレス生成モデルの認知・感情過程を，横断的に検討する．仮説は以下の通りである．

（１）経験・成長目標と抑うつ傾向との負の関係について：経験・成長目標の高い生徒は，友人からの拒否的な反応には関心を向けないため，友人からの反応をネガティブに知覚しにくく，また，友人からの受容的な反応を期待しそれに敏感になるため，友人からの反応をポジティブに

知覚しやすくなり，その結果抑うつ傾向が低まるであろう．

（2）評価－接近目標と抑うつ傾向との負の関係について：評価－接近目標の高い生徒は，友人からの拒否的な反応を無視するため，友人からの反応をネガティブに知覚しにくくなり，また，友人からの受容的な反応を期待しそれに敏感になるため，友人からの反応をポジティブに知覚しやすくなり，結果として抑うつ傾向が低まるであろう．

（3）評価－回避目標と抑うつ傾向との正の関係について：評価－回避目標の高い生徒は，友人からの拒否的な反応を予期しそれに敏感になるため，友人からの反応をネガティブに知覚しやすく，また，友人からの受容的な反応に注意を向けたり，ポジティブな反応を得られる可能性を考えたりすることができないため，友人からの反応をポジティブに知覚しにくくなり，その結果抑うつ傾向が高まるであろう．

方法

被調査者　群馬県内の公立D中学校の1年生34名（男子16名，女子18名），2年生39名（男子20名，女子19名），3年生27名（男子12名，女子15名），合計100名．

調査時期　2001年12月の上旬．

質問紙　**目標志向性尺度**：研究1において作成された尺度を用いた．

拒否への予期・感受性／受容への期待・感受性尺度：否定的評価懸念尺度や肯定的評価懸念尺度を参考にして，独自に作成した．拒否への予期・感受性に関しては，①友人からの拒否や嫌悪への予期を測定する項目（「友達から嫌われるのではないかとしばしば考える」，「『みんなの前で失敗したらどうしよう』とよく心配になる」，「友だちが自分を悪く思うのではないかと気にしすぎることがある」など，合計4項目）と，②

友人からの否定的な評価への敏感さを測定する項目(「友達からの嫌な視線を感じ取りやすい」,「友だちのちょっとした言葉やしぐさから,『自分は嫌われている』と考えてしまう」,「友だちがひそひそ話をしていると,『自分の悪いうわさをしているのであろう』と考える」,合計3項目)の7項目で構成されている.受容への期待・感受性に関しては,①友人からの受容や好意への期待を測定する項目(「友達にはたらきかければ,その友達は自分のことを快く受け入れてくれるであろうと思う」,「友だちは自分を好意的に受け止めてくれるに違いない」,「友だちに何かいいことをすれば,その友だちは自分のことをきっと好きになってくれるであろうと思う」など,合計4項目),②友人からの肯定的な評価への敏感さを測定する項目(「自分が何かいいことをしている時,みんなから注目を浴びているように思う」,「友だちからのちょっとした言葉から,『きっと自分のことをほめてくれているに違いない』と考える」,「友だちが自分に何かしてくれた時,それはその友だちが自分のことを好意的に思ってくれているからであろう」など,全4項目)の8項目で構成されている.各項目について「まったくあてはまらない」(1点),「あまりあてはまらない」(2点),「すこしあてはまる」(3点),「とてもあてはまる」(4点)の4件法で回答を求めた.

出来事のネガティブ/ポジティブな知覚尺度:杉山・坂本(2001)の被拒否感・被受容感尺度を,中学生にわかる表現に一部修正して使用した.被拒否感は,「友達から無視された」,「友だちから見捨てられた」など合計8項目で構成され,被受容感は,「友だちが私にこころよく接してくれた」,「友だちから理解された」など合計8項目で構成されている.それぞれの項目について,「この1ヶ月の間に友だち関係の中で感じたことについてお聞きします」という教示のもとで,「全然感じなかった」(1点),

「あまり感じなかった」(2点),「少し感じた」(3点),「とても感じた」(4点)の4件法で評定を求めた.

抑うつ傾向尺度:研究2—1と同じであった.

手続き　担任教師によってクラス毎に集団で実施された.

結果と考察

(1) 拒否への予期・感受性/受容への期待・感受性尺度の検討

まず,各尺度項目について,天井効果及びフロア効果を示した項目があるかどうかを検討したところ,そのような項目はなかった.

次に,拒否への予期・感受性/受容への期待・感受性尺度を因子分析した.初期解を主成分解で求め,2因子を抽出し,バリマックス回転を施したところ,第1因子には,拒否への予期・感受性を測定するために作成された項目が高く負荷し,第2因子には,受容への期待・感受性を測定するために作成された項目が高く負荷しており,ほぼ仮説通りの因子構造が得られた.

各因子を構成する項目で下位尺度を作成し,各下位尺度の平均値,標準偏差,α係数を求めた結果がTable 9—4に示されている.平均値と標準偏差から,各尺度において得点の偏りは認められなかった.また,α係数に関しては,拒否への予期・感受性尺度は.85,受容への期待・感受性尺度は.82と,十分な値であった.そして,2つの尺度間の相関係数を算出したところ,.48(p<.01)と中程度の正の相関が示された.友人からの評価に敏感である生徒は,ある程度,友人からの拒否的な反応と受容的な反応の,両方の反応への期待や敏感さを示しやすいと考えられる.

Table 9－4　拒否／受容への期待・感受性尺度の
平均（*M*）・標準偏差（*SD*）・α係数

	拒否への予期・感受性	受容への期待・感受性
M	17.94	17.43
SD	4.57	3.99
α	.85	.82

（2）ディストレス／ユーストレス生成モデルの認知・感情過程の検討

分析に先立って，各尺度の平均値・標準偏差と各尺度間の相関係数を求めた．結果はTable 9－5に示されている．結果から，各尺度に得点の偏りはないものと考えられる．

次に，「目標志向性→拒否への予期・感受性／受容への期待・感受性→出来事のネガティブな知覚／ポジティブな知覚→抑うつ傾向」というプロセスを重回帰分析により検討した．結果はFigure 9－5に示されている．

まず，「3つの目標→拒否への予期・感受性」，及び，「3つの目標→受容への期待・感受性」という重回帰分析を行った．その結果，それぞれ重回帰式は有意となった（順に，$F(3,\ 96)=11.27,\ p<.01$；$F(3,\ 96)=26.98,\ p<.01$）．標準偏回帰係数を検討すると，拒否への予期・感受性に対しては，仮説通り，評価－回避目標から有意な正のパスが示された．しかしながら，経験・成長目標及び評価－接近目標からの負のパスは示されなかった．一方，受容への期待・感受性に対しては，仮説通り，評価－接近目標から正の有意なパスが示された．しかしながら，経験・成長目標からの正のパス，及び，評価－回避目標からの負のパスは示されなかった．

次に，「3つの目標，拒否への予期・感受性，受容への期待・感受性→出来事のネガティブな知覚」，及び，「3つの目標，拒否への予期・感受性，受容への期待・感受性→出来事のポジティブな知覚」という重回帰分析を行った結果，それぞれ重回帰式は有意となった（順に，$F(5,\ 94)=3.85,\ p<.01$；$F(5,\ 94)=17.97,\ p<.01$）．結果から，出来事のネガティブな知覚に対しては，仮説通り，拒否への予期・感受性から正の有意なパスが示された．また，経験・成長目標からの直接的な負の有意

Table 9−5 各尺度の平均値(*M*)及び標準偏差(*SD*)と尺度間の相関係数

	M	*SD*	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
① 経験・成長目標	28.14	6.19	.55 **	.38 **	.36 **	.45 **	−.14	.57 **	−.28 **
② 評価−接近目標	17.99	4.68	−	.60 **	.44 **	.67 **	−.01	.54 **	−.30 **
③ 評価−回避目標	19.23	4.21		−	.44 **	.43 **	.11	.30 **	−.17 +
④ 拒否への予期・感受性	17.94	4.57			−	.48 **	.28 **	.29 **	.05
⑤ 受容への期待・感受性	17.43	3.99				−	−.04	.60 **	−.34 **
⑥ 出来事のネガティブ知覚	12.96	5.06					−	−.04	.50 **
⑦ 出来事のポジティブ知覚	18.34	5.42						−	−.44 **
⑧ 抑うつ傾向	19.72	4.86							−

注) + p <.10, ** p <.01, N = 100.

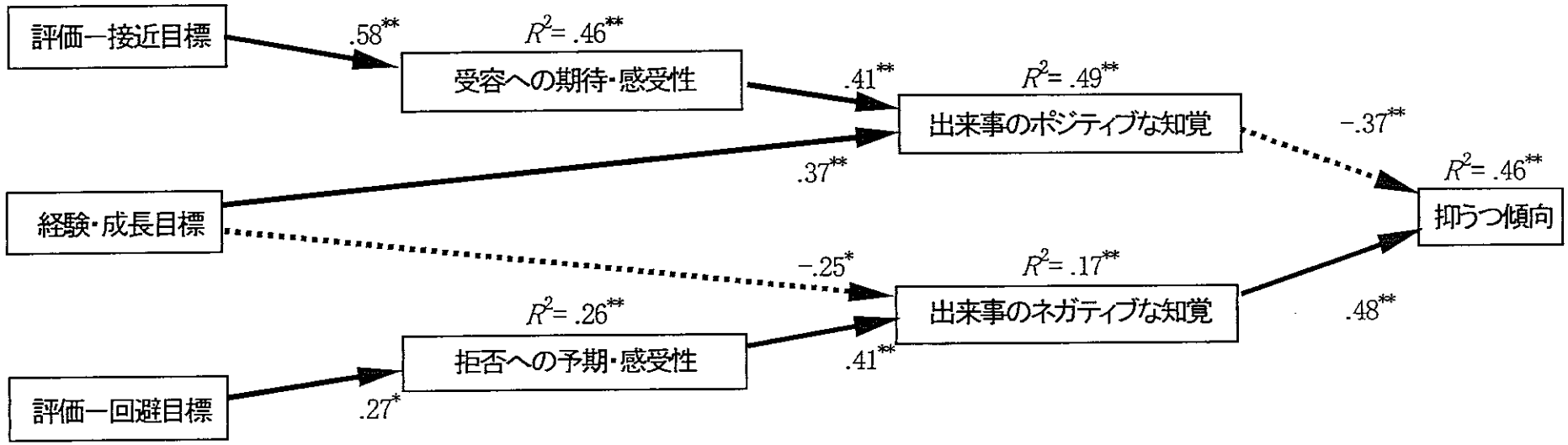


Figure 9—5 「友人関係における目標志向性→拒否／受容への期待・感受性→出来事の知覚→抑うつ傾向」の重回帰分析の結果

注) ＊p <.05, ＊＊p<.01. N=100.

なパスも示された．また，出来事のポジティブな知覚に対しては，仮説通り，受容への期待・感受性から正の有意なパスが示された．また，経験・成長目標からの直接的な正の有意なパスも示された．

最後に，「3つの目標，拒否への予期・感受性，受容への期待・感受性，出来事のネガティブな知覚，出来事のポジティブな知覚→抑うつ傾向」という重回帰分析を行った結果，重回帰式は有意となった（$F(7, 92)=11.12$, $p<.01$）．結果から，仮説通り，抑うつ傾向に対して，出来事のネガティブな知覚から正の有意なパスが示され，出来事のポジティブな知覚から負の有意なパスが示された．

以上の結果から，経験・成長目標は，拒否への予期・感受性ないし受容への期待・感受性を媒介せず，直接的に出来事のネガティブな知覚を低めたり，出来事のポジティブな知覚を高め，その結果，抑うつ傾向を抑制していることが示された．

また，評価－接近目標と評価－回避目標では，異なる認知・感情的働きをもち，それにより抑うつ傾向に異なる影響を与えていることが示された．すなわち，評価－接近目標は，友人からの受容的な反応への期待や敏感さを促進するため，友人からの反応をポジティブに知覚しやすくなり，その結果抑うつ傾向が低まる（ユーストレス生成モデルの認知・感情過程）．他方，評価－回避目標は，友人からの拒否的な反応への予期や敏感さを高めるため，友人からの反応をネガティブに感じ取りやすくなり，その結果抑うつ傾向が高まる（ディストレス生成モデルの認知・感情過程），という結果が示された．

また，仮説に反して，評価－接近目標が，拒否への予期・感受性及び出来事のネガティブな知覚を抑制することと，評価－回避目標が，受容への期待・感受性及び出来事のポジティブな知覚を抑制することは示さ

れなかった．評価－接近目標から拒否への予期・感受性に負のパスが示されなかった結果については，研究７において，評価－接近目標からストレスのネガティブな認知への負のパスが示されなかった結果と類似している．これらの結果から，友人からの良い評価に関心を向けることによって，友人からの悪い評価が完全に無視されたり，選択的に捨象されるわけではないと考えられる．同様のことは評価－回避目標に関しても当てはまり，友人からの悪い評価に関心を向けることによって，友人からの良い評価を得られる可能性に完全に関心が向けられなくなったり，友人からのポジティブな反応が選択的に捨象されるわけではないと考えられる．

第２項　縦断的検討　［研究 11］

目的

本研究では，目標志向性のディストレス／ユーストレス生成モデルの認知・感情過程を，縦断的に検討する．

方法

被調査者　群馬県内の公立Ｅ中学校の２年生 73 名（男子 37 名，女子 36 名），３年生 49 名（男子 25 名，女子 23 名，不明１名），合計 122 名であった．なお，被調査者の一部は，研究８－１と重複する．

調査時期　第１回目の調査は 2001 年 12 月上旬に実施し，第２回目調査は 2002 年７月の上旬に実施した．

質問紙　**目標志向性尺度**：研究１において作成された尺度を用いた．

出来事のネガティブ／ポジティブな知覚尺度：研究 10 において杉山・

坂本（2001）の被拒否感・受容感尺度を因子分析した結果，それぞれの因子に高い負荷量を示した4項目を用いた．評定法は，研究10と同じであった．

抑うつ傾向尺度：研究2―1と同じであった．

手続き　第1回目の調査（以下，Time 1ないしT1と略記）において目標志向性尺度と抑うつ傾向尺度を実施し，約7ヶ月後の第2回目調査（以下，Time 2ないしT2と略記）において，出来事のネガティブ／ポジティブな知覚尺度と抑うつ傾向尺度を実施した．調査は全て担任教師によってクラス毎に集団で実施された．

結果と考察

まず，分析に先立って，各尺度の平均値・標準偏差と，各尺度間の相関係数を求めた．結果はTable 9－6に示されている．結果から，各尺度の得点に，極端な偏りは認められなかった．

次に，「Time 1の目標志向性→Time 2の出来事のネガティブな知覚／Time 2の出来事のポジティブな知覚→Time 2の抑うつ傾向」というプロセスを，重回帰分析により検討した．結果はFigure 9－6に示されている．

まず，「Time 1の目標志向性→Time 2の出来事のネガティブな知覚」について重回帰分析を行った結果，重回帰式は有意とならなかった（$F(3, 118)=0.71$, *n. s.*）．他方，「Time 1の目標志向性→Time 2の出来事のポジティブな知覚」について重回帰分析を行った結果，重回帰式は有意となった（$F(3, 118)=5.80$, $p<.01$）．結果から，Time 1の評価－接近目標から正の有意なパスが示され，Time 1の評価－回避目標から負の有意なパスが示された．

Table 9−6 各尺度の平均値(*M*)・標準偏差(*SD*)と各尺度間の相関係数

	M	*SD*	②	③	④	⑤	⑥	⑦
① T1経験・成長目標	28.12	4.71	.41 **	.05	.12	.00	−.21 *	−.23 *
② T1評価−接近目標	18.33	3.92	—	.51 **	.12	−.02	−.03	−.18 *
③ T1評価−回避目標	19.03	4.21		—	−.23 *	−.12	.34 **	.09
④ T2出来事のポジティブ知覚	9.33	2.63			—	.11	−.25 *	−.03
⑤ T2出来事のネガティブ知覚	5.47	2.17				—	−.03	.56 **
⑥ 抑うつ傾向(Time1)	18.05	5.29					—	.29 **
⑦ 抑うつ傾向(TIme2)	18.27	4.44						—

注) * p <.05, ** p <.01.
N=122(ただし, 抑うつ傾向(Time1)とそれ以外の尺度との相関については, 欠損値のため*N*=106).

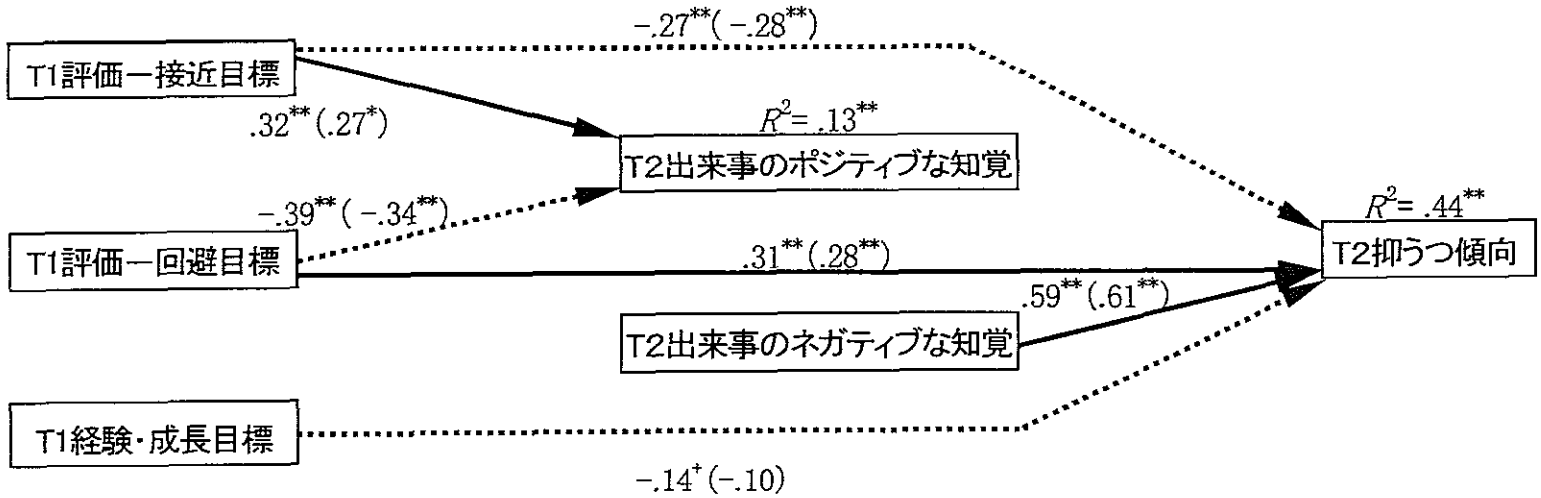


Figure 9ー6 「Time1友人関係における目標志向性→Time2出来事の知覚→Time2抑うつ傾向」の重回帰分析の結果

注） かっこ内の数値は，Time1の抑うつ傾向を独立変数として投入した時の標準偏回帰係数である．
＋p <.10，＊p <.05，＊＊p <.01．
N＝122（ただし，T1抑うつ傾向を独立変数として投入した時は，欠損値のためN=106）．

次に，「Time 1 の目標志向性，Time 2 の出来事のネガティブな知覚，Time 2 の出来事のポジティブな知覚→Time 2 の抑うつ傾向」という関係について重回帰分析を行った結果，重回帰式は有意となった（$F(5, 116) = 18.35$, $p < .01$）．結果から，Time 1 の評価－接近目標からの負の有意なパス，Time 1 の経験・成長目標からの負の有意傾向のパス，Time 1 の評価－回避目標からの正の有意なパス，そして，Time 2 の出来事のネガティブな知覚からの正の有意なパスが示された．

以上の結果から，Time 1 の評価－接近目標は，Time 2 の出来事のポジティブな知覚を高めるが，Time 1 の評価－回避目標は，Time 2 の出来事のポジティブな知覚を低めることが示された．この結果は，Time 1 の抑うつ傾向を独立変数として投入した場合にも同様に示された．

また，Time 1 の経験・成長目標と評価－接近目標は，直接的に Time 2 の抑うつ傾向を低め，Time 1 の評価－回避目標は，直接的に Time 2 の抑うつ傾向を高めることが示された．Time 1 の抑うつ傾向を独立変数とした時にも，これとほぼ同様の結果が得られた．

横断的検討の結果と一致する結果は，評価－接近目標が，出来事のポジティブな知覚を高めている（良い評価への関心が高いと，友人からの反応をポジティブに感じ取りやすくなる）という結果のみであった．評価－接近目標と抑うつ傾向との負の関係には，ユーストレス生成モデルの認知・感情過程が介在していると考えられる．

また，横断的検討においては，経験・成長目標から出来事のポジティブな知覚及び出来事のネガティブな知覚へのパスが示され，評価－回避目標から拒否への予期・感受性及び出来事のネガティブな知覚へのパスが示されたが，縦断的検討においては，これと同じ結果が示されなかった．従って，経験・成長目標と評価－回避目標に関しては，ディストレ

ス生成モデルの認知・感情過程，ないし，ユーストレス生成モデルの認知・感情過程が介在しているという確固とした結論を下すことはできない．そして，横断的検討においては，出来事のポジティブな知覚から抑うつ傾向に対する負のパスが示されたが，縦断的検討においては示されなかった．出来事のポジティブな知覚から抑うつ傾向への負のパスに関しては，杉山・坂本（2001）においても見出されており，理論的・経験的考察からも予測されるものである．縦断的検討においては，被調査者数が少なかったため，安定した結果が得られなかった可能性が考えられる．今後は，より大規模なデータを用いて，再度縦断的検討を行う必要があろう．

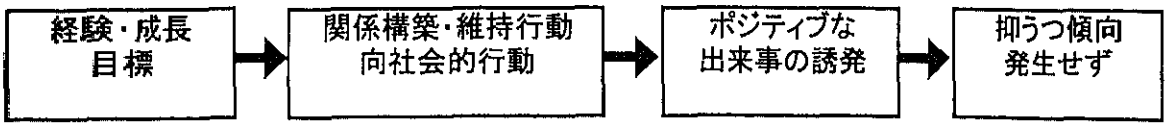
第３節　第９章のまとめ

第９章においては，友人関係における３つの目標と抑うつ傾向との関係に介在するもう１つのメカニズムである，ディストレス／ユーストレス生成モデルの検討を行った．研究８から研究11までの結果が，Figure 9－7に要約されている．

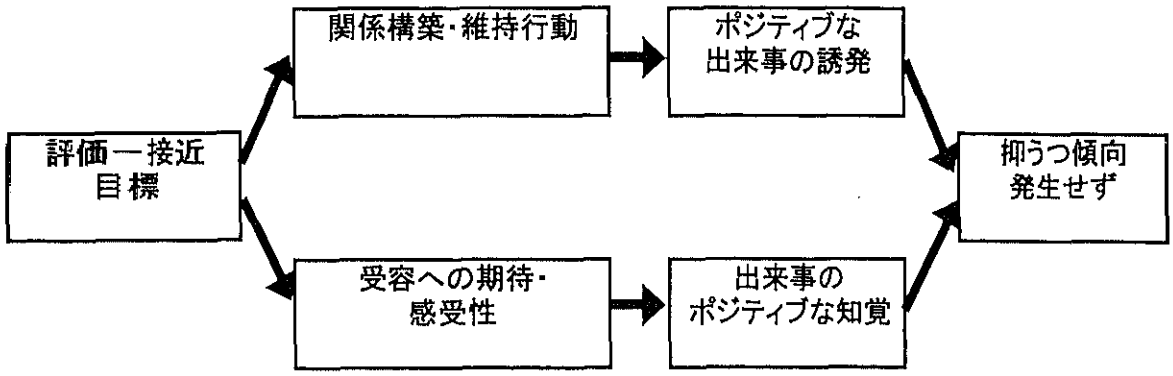
まず，研究８と９では，ディストレス／ユーストレス生成モデルの行動過程を，横断的及び縦断的に検討した．２つの研究に共通する結果をまとめると，以下の通りである．

（１）経験・成長目標の高い生徒は，関係構築・維持のために友人に積極的に働きかけたり，親切で友好的な振る舞いをするために，友人からポジティブな反応をされやすくなり，結果として抑うつ傾向に陥りにくい（ユーストレス生成モデルの行動過程）．

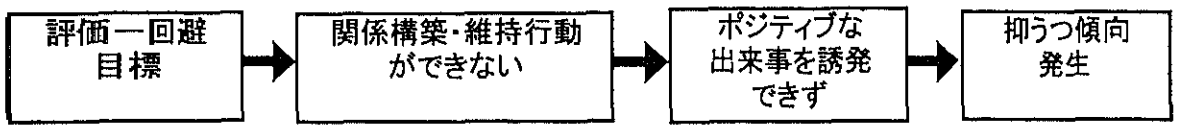
（ユーストレス生成モデルの行動過程）



（ユーストレス生成モデルの行動過程）



（ユーストレス生成モデルの認知・感情過程）



（ユーストレス生成モデルの行動過程）

Figure 9−7　第９章（研究８から研究11）の結果の要約

（2） 評価－接近目標の高い生徒は，関係構築・維持のための友人への積極的な振る舞い（接近行動）をするために，友人からポジティブな反応をされやすくなり，その結果，抑うつ傾向に陥りにくい（ユーストレス生成モデルの行動過程）.

（3） 評価－回避目標の高い生徒は，友人との関係構築・維持のための積極的な振る舞いができない（回避行動）ため，友人関係でポジティブな出来事を経験することができず，その結果として抑うつ傾向に陥りやすい（ユーストレス生成モデルの行動過程）.

次に，研究 10 と 11 では，ディストレス／ユーストレス生成モデルの認知・感情過程を，横断的及び縦断的に検討した．2つの研究に共通する結果をまとめると，次のようになる.

（1） 経験・成長目標に関しては，2つの研究に共通してディストレス／ユーストレス生成モデルの認知・感情過程が介在することはなかった.

（2） 評価－接近目標の高い生徒は，友人からの良い評価を得られることに期待を向けるため，友人からの反応をポジティブに感じ取りやすくなる．その結果，抑うつ傾向の発生が阻止される.

（3） 評価－回避目標に関しては，2つの研究に共通してディストレス／ユーストレス生成モデルの認知・感情過程が介在することはなかった.

以上の結果から，先述した仮説（第1部第6章第3節）に関して，支持された仮説は以下の通りである.

（1） 経験・成長目標に関して

3a のユーストレス生成モデルの行動過程に関する仮説が支持された．しかし，2a 及び2b の，ディストレス生成モデルの行動過程及び認知・感情過程と，3b のユーストレス生成モデルの認知・感情過程については，仮説が支持されなかった.

（２） 評価－接近目標に関して

３ａ 及び３ｂ のユーストレス生成モデルの行動過程及び認知・感情過程に関する仮説が支持された．しかし，２ａ及び２ｂの，ディストレス生成モデルの行動過程及び認知・感情過程については，仮説が支持されなかった．

（３） 評価－回避目標に関して

３ａ のユーストレス生成モデルの行動過程に関する仮説が支持された．しかし，２ａ及び２ｂの，ディストレス生成モデルの行動過程及び認知・感情過程と，３ｂ のユーストレス生成モデルの認知・感情過程については，仮説が支持されなかった．